

[既刊紹介] 湯川淳一文・松岡達英 絵, 『虫こぶはひみつのかくれが?』(福音館書店)

前藤 薫

湯川先生の訃報を知り、生前にいただいた本書をあらためて手にとった。「先生、見つけました!」と、女の子が、イノコズチの茎に虫こぶを見つけて湯川先生に告げるところから、物語は始まる。先生は「…、中を調べてごらん。」とうながし、となりにいた男の子が虫こぶを割ると、中からイノコズチウロコタマバエの白い幼虫が現れる。

虫こぶ探しがテーマの自然観察会では、イノコズチのほかにも、サクラの葉(中にいたのはアブラムシ)やケヤキの葉(ワタムシ)、エノキの葉(タマバエ)、ヨモギの茎(タマバエ)などにつくられた虫こぶが見つかった。虫こぶをつくる昆虫には、ほかにもタマバチやキジラミ、ハバチ、スカシバ、ゾウムシなどがあり、それぞれの昆虫ごとに虫こぶをつくる植物や部位はほぼ決まっていることが分かる。松岡さんの勢いのある精細画からは、虫こぶの生々しさや虫こぶをつくる昆虫たちのざわざわとした暮らしが迫ってくる。

もっとも、虫こぶの彼是だけであれば、今ならもっと詳しい図鑑があるインターネット上にも情報があふれている。だが、この絵本の真骨頂はここからである。

湯川先生は、「虫こぶほど安全で、住みごこちのよい家はなさそうに思える。…まるで、お菓子の家の中にあるようだ。」「でも、…ほんとうにいいことづくめなのだろうか?」と問いかける。この問いに答えてくれるのは、シロダモ(クスノキ科の常緑樹)の葉に虫こぶをつくるシロダモタマバエである。このタマバエは春にシロダモの葉に産卵し、幼虫が1頭だけ入った虫こぶをつくる。幼虫はそのまま冬を越し、翌春、成虫になって虫こぶから脱出する。つまり、年1世代の生活環をもつ昆虫である。

湯川先生(と学生さんたち?)は、1989年4月に35本のシロダモの新葉2850枚を調べ、そのうちの349枚から合計2792個の虫こぶを見つけ、目印をつけて追跡を始めた(この時点の幼虫数は2792頭)。5月になると、さっそく虫こぶごとヒメリンゴカミキリに食べられて残った幼虫は1699頭に。7月末までに虫こぶの生長が止まるものがあり幼虫は1388頭に。8月には暑さで虫こぶが枯れて幼虫は987頭に。さらに9月になると台風に見舞われて多数の虫こぶが落ちてしまい、12月に越冬をはじめた幼虫は473頭にまで減っていた。そのうちの369頭には寄生蜂(コガネコバチとコマユバチ)が寄生しており(寄生率78%)、ほかの25頭は原因不明のまま死亡したので、翌春4月に羽化したタマバエ成虫は79頭だけ。さらにその多くがクモに食べ



られたり寒くて飛べなかったりしたので、無事に寿命をまっとうした成虫はわずか24頭であった。これは前年春の幼虫の0.9%にすぎない。ちょっと心細くなるが、成虫の2/3はメスであり(約16頭)、それらが生涯に約200個の卵を産むので、今年も3000個くらいの新しい虫こぶがつけられる計算になる。なんとか前年と同じくらいの幼虫数が保たれていることがわかりホッとす

る。虫こぶは安全な住みかに見えるが、虫こぶごと食べられたり嵐で葉っぱが落ちたりすると逃げられないし、虫こぶに鋭い産卵管を突き刺して攻撃してくる寄生蜂を避けるのは難しい。彼らもいろいろな危険をのりこえて、がんばって生きているのだなと感心する。

湯川先生が専門にされたタマバエ類は、蚊によく似たなんとも地味な昆虫である。分類学的にはきわめて多様なのだが、どれもこれも小さくて同じような見た目ばかりだ。しかし、少し調べてみると虫こぶをつくる植物や虫こぶの構造の多彩さはもちろん、寄生する天敵や共生する生き物との関係がとて豊かであることがわかる。湯川先生のまわりにも色々な人が集まって、いつもたいへん賑やかだった。

なお、本書の初版は1992年(第2刷は1998年)だが、今でもオンライン古本屋などから入手できる。

(Kaoru MAETO 兵庫県宝塚市)